

活動成果報告書

令和5年度（第27回）「チヨダ地域保健推進賞」

活動テーマ 地域の看護職を元気に！地域包括ケアシステム構築を目指す「文京区看護職交流会」の取り組み	
グループ名称・氏名(グループの場合は代表者名) 文京区看護職交流会 代表者：阿部 智子	
勤務先：文京区役所 所 属：保健衛生部 保健サービスセンター 所在地：〒112-8555 東京都文京区春日1-16-21 TEL：03-5803-1807 FAX：03-5803-1371	

◇活動方針

文京区内の事業所等に勤務する看護職が、在宅療養者とその家族支援や、地域における療養を支えるために、職域を超えて互いの役割を知り、職域の健康課題の共有や事例発表等の活動を通じて、地域包括ケアシステム構築の基盤となる活動を行う。

◇活動内容とその成果

本活動は、平成26年に区内訪問看護ステーション連絡会の中で、同じ地域で働く医療職のネットワークの必要性や交流の場があるとよいといった声を受け、運営事務局が立ち上がった。活動開始当初は、訪問看護ステーションの看護師が中心となっていたが、その後、行政保健師や診療所看護師、医療機関の退院支援看護職や教育機関に従事する看護職も事務局に加わり運営を行っている。これまで本交流会に参加した職域は、訪問看護ステーション（21）、大学病院・都立病院等退院支援部門（7）、高齢者包括支援センター（4）、訪問診療医療機関（3）、高齢者介護保険事業所（8）、行政の保健衛生部・福祉部（4）、看護系大学等教育機関（3）、福祉職としての参加関係機関（10）、医師会・薬剤師会（2）にわたる。運営事務局は6機関10名の構成となっている。

運営方法としては、定期的に運営事務局メンバーが集まり、それぞれの職域での活動や課題と感じていることを共有する機会を持っている。その中から共通した課題を選定し、交流会のテーマを決定している。また、交流会開催時にアンケートをとっており、参加者からも交流会で扱いたいテーマを募っている。開催内容としては、講演もしくは事例発表を聞いて、参加者同士のグループワークを行う形を取っている。本会では、様々な意見や課題が語られるがグループワークを通して、他人事ではなく自分事として持ち帰ってもらうことを意識している。

活動成果報告書

〈これまでに開催した交流会のテーマと参加者数〉

開催年月日	テーマ	参加者数
第1回 平成25年6月7日	顔の見える看護職のつながり～同じ地域で働く医療職のネットワークの必要性～	47名
第2回 平成26年7月11日	「より良い地域連携を考える」～退院支援の困難事例を通して～	58名
第3回 平成26年11月26日	「高齢者・障がい者を支援するサービスについて」～障害福祉サービスと介護保険サービスの適応関係について～	39名
第4回 平成27年3月12日	事例検討会「地域で自立した生活を送るための地域支援を考える」	53名
第5回 平成27年7月3日	「これからの地域を支えていくために自分たちは何ができるのか？」～医療連携拠点事業・高齢者包括支援センターの活動報告とグループワーク～	47名
第6回 平成27年11月6日	「みなし2号のターミナルケースを通じての学び」	45名
第7回 平成28年3月4日	「事例検討と事例検討の持ち方・進め方」	36名
第8回 平成28年7月7日	「ファシリテータースキルを身につける」	68名
第9回 平成28年11月4日	「病院と地域の連携を深めるために」～その手段をみんなで考えよう～	55名
第10回 平成29年3月3日	「おばあちゃんが変わっちゃった！」～認知症高齢者の在宅医療・介護・地域包括ケアを考えよう～	61名
第11回 平成29年7月7日	「看護職の伝える力を高める」～明るく、楽しく、たくましく、伝える力が育む自分も地域ケアも～	66名
第12回 平成29年11月22日	「知らなきヤソンソン！世帯支援」～福祉と看護（医療）で支える精神障がい～	55名
第13回 平成30年2月22日	「訪問看護の実践報告」	58名
第14回 平成30年7月6日	「地域生活を支える座談会～障害があっても、病気があっても～」地域健康問題とは？看護職に期待することは？	74名
第15回 平成30年11月16日	「子どもの虐待から考えよう」～行政から・病院から・訪問看護から～	68名
第16回 平成31年2月28日	ACP 人生会議の一事例～チームの中の不協和音、そして穏やかな看取り～	58名
第17回 令和5年12月7日	コロナを総括する ～その時、地域で何が起きていたか～	65名

活動の成果として、健康課題の共有や事例検討を行うことで、顔の見える関係づくり、療養者の多角的な側面理解と看護に限らない支援の可能性を学ぶ機会となっていることが挙げられる。また、職域は違えど、地域住民の健康やより良い暮らしに寄与したいという同じ志を持つ仲間との学び合いが、地域の看護職をエンパワメントしている。活動を継続する中で、「様々な参加者の話が聞けること、勉強になり励みになる。」「繋がりや顔の見える関係づくりの大切さが分かった。」「相談できる場ができてよかった、継続してほしい。」「日常業務に生かしたい。」といった意見も聞かれている。事例検討を通して、単独の事業所内では、対応困難だったケアの課題を解決するヒントを得て、それぞれの事業所に持ち帰っている。また、様々な制度や地域資源について知り、実際に日々のケアに活用している体験談を聞く機会は、すぐにでもより良いケアが実践できる状況を生み出している。交流会の開催テーマについては、看護や医療の内容に捕らわれず、福祉的な課題や地域づくりに関する課題等、幅広い視点で議論が展開されている。福祉職の参加者もあり、医療福祉連携を強化する役割も果たしている。

令和5年度より約3年間休止していた活動を再開し、12月に第17回を開催することができた。休止期間中、地域の看護職がどのように新興感染症の大流行と向き合ってきたのか、この経験を今後

活動成果報告書

活かすにはどうすればよいかを考える機会としたいという意見が多く聞かれた事もあり、再開後初の交流会は、『コロナを総括する ～その時、地域で何が起きていたか～』というテーマで開催した。訪問看護ステーション、行政保健師、高齢者・障がい者施設施設長、地域の開業医を招いてのパネルディスカッションと参加者全体のグループワークを行った。

グループワークでは、「その時地域で何が起こっていたか」というテーマで体験の共有を行った上で、「各施設で課題解決に向けてできること」と「職場だけでは解決されない課題つまり地域全体で取り組むべき課題」の整理を行った。各施設でできることとしては、スタッフの感染対策として PEE の装着手技の獲得や PEE 装着した上でのケアの技術の向上が挙げられた。また各施設で B C P の作成に取り組んでいる、または取り組む予定であるといった意見も聞かれた。地域全体で取り組むべき課題としては、連携体制の強化として、普段から施設や医療機関といったそれぞれの事業所が繋がっておくこと、相互に補い合える、支え合えるネットワークを作っておくことが重要であるといった意見が多くあった。そういったネットワークができていれば、不足した衛生材料等を共有できる仕組みができるのではないかとといった意見もあった。物資が不足している事業所と余っている事業所で協力できるシステムがあればよいといった意見は複数聞かれ、実際に保管場所では協力ができるかもしれないといった提案もあった。

アンケート（65名中37名回収：回収率57パーセント）から、参加者の約7割が看護師、保健師であること、約3割が医師、リハビリ職、ヘルパー、ケアマネ、事務職であることが分かった。第一部のパネルディスカッションの満足度は、「とても満足」が89.2%であり、第二部のグループワークの満足度は、「とても満足」が70.3%であった。また、今日の講演が今後に生かせるかの問いでは、97.3%が「はい」と回答している。今回の交流会で印象に残った言葉を聞いたところ、「普段からの連携体制」「同じように頑張っている顔の見える仲間が存在」が最も多い20人からの回答があった。その他にも肯定的なワードとしては、「まず自分の健康を守る」「初期対応の重要性」「大変なことを楽しむ」「コロナで得た感染対策技術は私たちの確実な技」といった言葉の複数回答があった。「看護師全滅」「想像以上のストレス」「パニックの連鎖」といった深刻な現場状況を映すワードが印象に残ったと回答した方も複数あった。

新型コロナウイルス感染症の対応について、改めて振り返る良い機会になったという参加者からの声を多く聞いた。また、グループワークの発表では次々と挙手が上がり非常に活発な議論、参加者の意欲的な姿勢が見られた。高齢者施設では、勤務する看護師全員が出勤できない状況になったといった厳しい内容のお話もあったが、それぞれの現場で医療・福祉職が目の前の課題に全力で向き合っていたことが全体で共有されたため、参加者同士を励まし元気づける時間となったと事務局としては捉えている。

◇今後の計画

事務局の議論の中では、活動休止中に区内に開設された地域生活支援拠点等の新たな施策に関する疑問や課題についての意見が出ており、医療と福祉の連携や区民が真に安心して過ごすことができる地域づくりについても今後の看護職交流会のテーマとして取り上げていく予定である。

本活動を通じて、参加者が区民の健康課題について能動的に考えることで、より良いケアの実践と「共に支え合う地域づくり」への意識、そのような高い志を持つ看護職のネットワークが醸成された。今後も看護職同士の交流の場、看護職と福祉職等の他職種との交流の場を開催しつつ、看護職が活動を通して把握した健康課題や地域課題に対して、区民へ直接的にアプローチすること（演劇型のお届け講座やまちの保健室等）にも取り組んでいきたい。